

いわかづみ

令和三年三月 第八四号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(3)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑩)
- ◇ 方言一考(しゃみこき)
- ◇ モノ言うもの(関谷学園資料①)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(3)

内須川城址と小山さんと左衛門尉

渡辺 伸 栄

米沢からのメール

昨夏のことです。先祖のルーツを探るうち貴HPに行き当たったのでと、旧米沢藩士の末裔という米沢市在住の小山恒二さんから、丁寧なメールでした。

小山姓は多数で、中々探しあぐねていたところ、「曾曾曾祖母」(五代前)が同じ米沢藩士の内須川家から嫁いだ人だと分かり、珍しい姓なのでネットで検索すると、私の「内須川城址探索記」がヒットしたと言います。二〇一五年五月十一日の藪漕ぎ探索記です。

関川村に内須川氏のルーツがあった。上杉景勝に従ってそこから会津・米沢へ転属してきた家に違いない。R113を通るたびに関川村にどこか惹かれるものを感じていたのはそのせいだったのか、というわけです。

それで、内須川城址を探訪したので案内をお願いできないかというのがメールの主旨。猛暑の頃でしたから、秋にしようとして、その秋になりました。

内須川城址探訪

十月、ちようどクマ出没の真つ最中。とは言え、約束は約束。歴史館の田村さんから峠歩き用の爆竹をもらって、山中、爆裂弾をかませながらの案内でした。

内須川城址は、内須川集落の背後にある綺麗な三角形をした目立つ山です。赤谷川を挟んで対岸の赤谷城址と対をなしています。

城址探訪は、赤谷川の谷の入口から左の山へ登りつきます。送電線の下、広く切り払われた斜面の管理道を辿り、しばらくして道を外れて林内の藪中に分け入り尾根筋を捜します。山頂間近になると、尾根に空堀や切岸・曲輪の跡が出てきます。空堀は尾根を堀割って分断した所。切岸は斜面を削って急崖にした所。曲輪(くるわ)は斜面を削って平らにした所。これらが出てくればそこは山城だった証です。

標高 142.7m
の四等三角点がある山頂が、平らに均された本丸の跡です。

そこに立った小山さん、ここがお城か？と怪訝な様子。それで、私からひと講義。中世の山城は実戦用で、石垣も無ければ白壁もない。戦闘法はもっぱら投石に丸太転がし。



そもそも、ここへ逃げ込んだらこっちの勝ち。敵は損害の大きさを計って、攻撃を諦めることなど。

頷いて小山さん、おもむろにザックから取り出したのは清酒と三段重ねの白餅。何をするかと思いきや、それらを三角点の前に供えて、同行の方と一緒にしゃがんで手を合わせ、やおら祝詞を唱えだした。いずれ子どもを連れてもう一度訪れたいとおっしゃる。

私の子どもの年代に当る若い方が、こうやって、今の自分に繋がる祖先の霊に拝礼し、山上藪中で手を合わせる姿。傍らで感動の面持ちで眺めたものです。若い衆もなかなかやるものだと。



内須川左衛門尉

入山前、旧内須川集落の奥まで車で案内しながら、「関川村史」の記事を紹介しました。板額御前の勇戦で名高い城氏の反乱（一二〇一年）で、鎌倉幕府方として内須川左衛門尉（さえもんじょう）が、逸早く参戦した。

内須川氏は鎌倉時代以前から、赤谷川の流域

を治める有力な土豪だったと思われることなど。

赤谷川添いの谷間には中に入ると意外に広く、緩やかな傾斜は水利に適して、周囲の低山地帯は燃料はじめ資源の宝庫です。赤谷の名からは鉱物資源も想像されます。ここが内須川氏の本拠地、赤谷川を挟む二城は、谷間の堅塁です。

それで、内須川城址の後は、対岸の赤谷城址の探訪です。この山頂（本丸址）にはその昔、大きな笠松があつて、どこからでもよく見えてたものなどと、ひとくさり。山頂には、枯れた笠松の二代目を狙う松たちが、藪中に数本。代を継ぐまであと何十年かは、かかるでしょう。

生者に繋がる死者

内須川氏は、戦国時代を黒川氏の家臣として生き抜き、景勝の会津移封でこの地を離れ、米沢藩士として生き続けました。

小山さんが言うには、その内須川家の本家末裔が現在、長野県内に在住で、機会があったら祖先の地にお連れしたいと。

松は枯れ人は死す。しかし、こうやって祖先を想う人がいる限り、死者は生者の中で生き続けます。歴史は、そのために語り継がれるのです。

民具が語る生活史

民具⑩ボウバカリ(棒秤)、サオバカリ(棹秤)

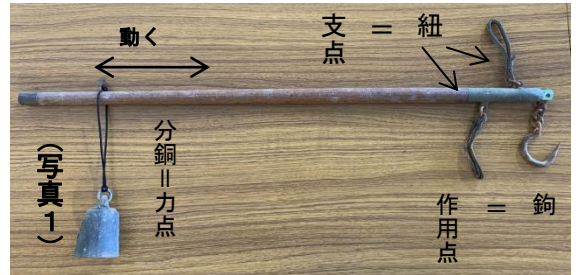
関川村在住の方から、ボウバカリ(棒秤)と銅(ふんど)を寄贈いただきました。関川村ではボウバカリと呼びますが、サオバカリ(棹秤)と呼ぶ地域もあります。これらは梃子(てこの原理を利用した物の重量を量る道具)です。

ボウバカリの使い方ですが、重量を量るために目盛がつけられた棹(さお)の紐を支点、先端についた鉤(かぎ)を作用点とし、計量するものを下げます。そして、鉤の逆側に分銅を吊り下げて力点とし、分銅をスライドさせて移動し、水平を保つ位置を求めます。水平となった目盛を読むことで、物の重さがわかるという仕組みです。(写真1参照のこと)

棹の先端は金属です。先端部には180度動く鉤があり、この鉤に量りたいものを吊り下げます。ここに皿が付いていて、物が乗せられるようになってくるものもあります。紐は棕櫚(しゅろ)縄、麻縄など、重さに耐え得る素材で、上下に付けられています。鉤から遠い紐と近い紐を使った場合では支点が変わるので、棹には目盛が二種類刻印されています。重い物を量るときは、梁(はり)などに打たれた釘にボウバカリをかけて使ったといえます。

秤自体の歴史は古く、梃子の原理を用いた天

秤は古代エジプトの遺跡からも発見されています。また、中国では、唐の時代に銭貨「開元通宝」が作られ、寸法・重量ともに正確であるため、重量単位「一錢」として用いられるようになりまます。やがて日本で唐に習った律令制度が整うと、還元通宝も伝来し、匁・貫といった度量衡の単位が広まります。室町時代から戦国時代には商業の発展と共に秤が広く用いられますが、度量衡が各地で異なっている不都合が生じるので、度量衡統一の動きが加速します。江戸時代に入ると、徳川家康は甲斐の秤細工人だった守随(しゅずい)家に東三十三国の秤座を掌握する権利、神(じん)家には西三十三国の権利を与えました。秤座は、秤の製作や販売を独占し、不当な秤を没収して摘発する権限を持ち、全国に出向いて秤の検定「秤改め」を実施します。近隣では、守随家の出張所は柏崎や長岡、新潟にありました。村上市の旧鑄物師村は元々鑄物師の集落として発展したと伝わりまますが、「秤等検査の守随役人様達は郡内検査お廻りの節は当村(鑄物師村)を宿所とし



たととはつきり言い伝えられている」(『荒川町史』p. 329) ようです。関川村旧小見村の庄屋、平田甲太郎家文書にも守随家が登場します(平田甲太郎家文書No. 674の冒頭部抜粋、写真2)。江戸幕府の統制力の強さが窺い知れます。



一、守随善四郎二人之秤目無 相違被仰付候上者六十六ヶ国ニ而用之遺 可申事 (写真2)

江戸時代に統一されたボウバカリは、江戸期、明治、大正を経て、昭和30、40年ごろまでこの地域で使われていました。米を量るときに使っていた方は、先に分銅の位置を俵1俵(60キロ)に合わせ、米を増やしたり減らしたりして量っていた、とおっしゃっていました。

極めて一般的で、身近な存在であったボウバカリですが、私は物理系が不得手なので、梃子の原理を元にボオバカリを考え、使いこなしてきた先人に敬服します。また、2月から友の会ボランティアスタッフに協力を仰ぎ、民具の整理作業を進めています。種々の民具は、機能はもろろデザイン性に富み、様々な観点から感心することしきりです。モノは自ら語りませんが、モノの語り、使われてきた方の思いを聞き取っていききたいです。(田村舞子)

参考文献 荒川町史編纂委員会編一九七四『荒川町郷土史』、民具学会編一九九七『ボウバカリ(棒秤)』、『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・しやみこき

「しやみこき」あるいは「しやみこき」は「怠け者」という意味である。北海道に「三味線弾く」という方言があつて、歌に合わせて三味線を弾くように、相手の話に適当に合わせてごまかす、嘘をつくという意味らしい。怠け者と嘘つきでは意味合いが違うので「しやみ」は「三味線」の「しやみ」ではないようだ。すると「しやみ」「しやみ」は「しらみ(虱)」で、虱がたかるほど不潔でも構わず、それを取るのさえ面倒くさがるほど怠け者だという意味だろうか。「こき」は侮蔑するときに付ける接尾語、嘘こきと同様だ。東北には「いい振りこきの虱たかり」という言葉がある。理に叶った良い事ばかり言っても、言う本人が虱たかり(怠け者)では説得力が無い、くらしいの意味だろう。そういう意味では道の駅の影の管理者、我がWK氏、見かけは虱たかりにも見えなくもないが、とにかくこまめだ。最近民具整理を手伝ってもらっているため、昼食の弁当を歴史館で開くことが多いのだが、全て自ら手作りで手の込んだものばかりの内容。特に目を引くのは鯖の味噌煮で、

サバの上には一緒に煮込んだ生姜も載っている。しかも糖尿病予備軍であるので総てカロリー計算している。膝を悪くしてから唯一の趣味である登山もできなくなり、今は同じ弁当を夫人に持たせて新潟まで送迎するのが日課、週末には一見しゃみこきの風体で道の駅でゴミを拾い、車のナンバーを調べる生活。真似しようとも思わないが真似のできることででもない。平たく言えば奇特定の人物だ。(安久)

モノ言つもの・関谷学園資料①

先般テレビ放映のための取材で、常には展示せず収蔵庫に保管している関谷学園の資料を改めて見る機会があった。六・三・三制発祥の地として熱く語る方も多いし、取材はその顕彰となるのだけれど、個人的にはこの学園が果たした役割については以前から懐疑的であった。なぜなら学園の実験校として開園は昭和二十一年の七月で、七ヶ月後の翌年三月には新学制が公布されているからだ。つまり、実験として開園した関谷学園の実験結果を検証することなく、新学制の準備は進んでいたであろうと推測できるからだ。故に、先駆的な役割は果たしたものの、実験校として役割を果たしたかは疑問だった。語弊はあるが、梯子を外されたようなものだったと推測する。また、村長で豪農



の当主が政治的にも経済的にもバックアップするという特殊な状況があったからこそ開園できたのであって、実際他の二校は開校できなかった。そんな観点から今後何回かにわたって残された資料に触れてみたい。(写真は開園に深く関わった当時の村長渡辺万寿太郎氏が書いた学園の看板。開園当初の写真には映っていないので開園した後揮毫したものか)(安久)

歴史館行事の報告

○山と花のスライド解説会



(1月17日(日)、総勢十七名)
コロナ渦の中、それでも沢山集まってくださいました。ありがとうございました。

○古文書解読講座(12月〜2月、計14名)

今年度も道中記を読み進めました。伊勢、近畿を巡り、次はいよいよ金比羅です!

お知らせ・参加者募集

○「かな・漢字 五人展」4月18日(日)まで開催中! 関川小学校や公民館で書道を教えてください。さっさといる鈴木政信さんとお仲間の作品展です。

○講演会「関川村の地層について〜さざれ石を中心に〜」とき:4月21日(水) 19時〜20時半 ところ:公民館大ホール 講師稲葉充氏(大石) 参加費:無料

○良寛のあるいた峠を越えて①高鼻・貝淵峠と小国町の史跡 とき:4月11日(日) 9時〜16時、参加費:無料(村外の方は友の会会員の方) ○一緒に十三峠踏破しましょう!

○初心者のための春登山「牟礼山」 とき:4月18日(日) 7時〜16時、ところ:関川村と胎内市の境「牟礼山(むれやま)」(615m) 参加費:無料 ○初心者の方、体力に自信のない方、この機会にぜひご参加ください!

○春の健康登山「大蔵山〜菅名岳」とき:4月24日(土) 6時〜17時半、ところ:五泉市大蔵山(864m)、菅名岳(909m)、参加費:村民千円、村外の方二千円(村外の方は村民の友人が参加すること) ○雪の稜線歩きを楽しみましょう!

○令和3年度古文書解読講座 とき:4月から11月の第2、4水曜、午後1時半から、ところ:エントランスホール、参加費:資料代、一回50円ほど。初回は4月14日(水)です。

いわかがみ 第八四号

発行日 令和三年三月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300